

が「貪欲」と訳されずに「重銅」と訳されたと思われる。
この別訳の原語はガンダーリ語の可能性がある。

略語表

- 写本＝チェンマイの Wat Library に属する写本。
L 写本＝ランペーンの Wat Lai Hin に発見された写本。
Ee＝Samyutta-nikāya, vol. I, ed. by L. Feer, PTS. [L 写本一本 (B) とヤンロン写本三本 (S₁～S₃) と Spk のタイ写本 (C) がある。]
Spk＝Sāvatthapakkasini, ed. by F. L. Woodward, PTS. タイ写本 (Se)＝Syaṃa-raṭṭhassa Tepiṭakam, Bangkok, 1980.
J 写本写本 (Be)＝Chaitiṃ-saṅgāyana Edition, Rangoon, 1957.
雑阿含＝雑阿含經 (大正藏經第二卷 No. 99)
別訳＝別訳雜阿含經 (大正藏經第二卷 No. 100)

註

- (1) 拙稿「北部タイ新出相應部写本研究 (一)」(『佛敎論叢』二十九号、昭和六〇年九月、浄土宗敎学院)、「同研究 (二)」(『浄土宗敎学院研究所報』七号、昭和六〇年八月、浄土宗敎学院)。
(2) (1) の型に属するものは、imam gātham が ima gāthāyo となるもの、abhāsi が avoca となるもの、imam gātham abhāsi が imam udānam udānesi となるものがあ

Sanskāra (行) 考

村上真完

原始經典以来用いられる術語 saṃskāra (saṃkharā, 行^sと略) の意味とその重要性については、一般によく理解されていない。意味については、例えば、内的意志 (木村泰賢)、為作、為作一般 (和辻哲郎)、形成作用、形成力 (中村元)、Gestaltungen (H. Oldenberg, Buddha), Hervorbringen, Vorstellung (O. Franke, Dighanikāya), Her-litions and other faculties, will and other forces (Th. Sideritsky, The Central Conception of Buddhism) の如く区々である。

s は五蘊 (色・受・想・行・識)、十二縁起 (無明・行・識・名色……) に含まれる。諸行無常ともいう。また

saṃkāruppatti (行生、志向による転生、来世への願、志向を含む諸の力による転生、M. III. pp. 99-100)

jīvitā-saṃkhārā (命行、生命力、生命持続力、D. II. p.

99)

- re. (H) の型に属するものは gāthāya が gāthahi となるもの、ajjhāsi が paccābhāsi となるものがある。
(3) W. Geiger, Die Gruppen geordnete Sammlung, vol. I, München-Neuberg, 1930, P. 24.
(4) Mrs. R. Davids, The Book of the Kindred Saying, vol. I, PTS, 1917, P. 220.
(5) Helmer Smith, Saddanti, La grammaire Palie, d'Aggavamsa, 5 vols, Lund, P. 418, Notes 1.
(6) Helmer Smith が Spk 46 「maññatan ti maññanam」を引用するが、PTS 版の Spk (P. 52, l. 1) とはチェンマイの L 写本の maññan であるが、maññatan は違う。
(7) このメーターは trisūbh である。一と二と三と四と五と六と七と八と九と十と十一と十二と十三と十四と十五と十六と十七と十八と十九と二十と二十一と二十二と二十三と二十四と二十五と二十六と二十七と二十八と二十九と三十と三十一と三十二と三十三と三十四と三十五と三十六と三十七と三十八と三十九と四十と四十一と四十二と四十三と四十四と四十五と四十六と四十七と四十八と四十九と五十と五十一と五十二と五十三と五十四と五十五と五十六と五十七と五十八と五十九と六十と六十一と六十二と六十三と六十四と六十五と六十六と六十七と六十八と六十九と七十と七十一と七十二と七十三と七十四と七十五と七十六と七十七と七十八と七十九と八十と八十一と八十二と八十三と八十四と八十五と八十六と八十七と八十八と八十九と九十と九十一と九十二と九十三と九十四と九十五と九十六と九十七と九十八と九十九と百と。
(8) J. Brough, The Gāndhārī Dharmapada, London, 1962, P. 149. また P. 96-97 では bh 2 h 2 の交換について論じている。

āya-s. (寿行、寿命の力、寿命持続力、D. II. p. 106, M. I. p. 296)

bhava-s. (有行、生存力、生存持続力、D. II. p. 107)

という用例がある。この最後の方の例は s が生命や生存を持続させる力、勢い、つまり勢力であることを示唆している。行生の行 (s) とは来世の境遇を決定する力であり、その力は、願、希望、志向から出ている。即ち、信・戒・聞・推離・慧をそなえた比丘が「死後に……に生まれるように」と思って、その心を定め、心を保ち、心を修する。彼の諸の s と心がけ (住) とが、このように修せられると、そこに生まれることに資する (M. III. pp. 99-100) と説かれる。これは人が死ぬときにいたく意向、志向が、死後の存在を規定するという觀念であり、それは古ウパニシャドにおいても認められるものである (それは Sāṃdhiya や Yājñavalkya に帰せられる。拙著『サートン哲学研究』八五―八六頁参照)。そういう来世を規定する力 (＝志向、願) を仏教では s と呼んだのである。

行生の s (行) は志向と密接な関係があるが、寿行は必ずしも志向と関係しない。尤も仏は寿行を捨てたといふ (D. II. p. 106) ので、意志も関与することもある。し

かし、寿行は感受される法とは異なる。その理由は、想受滅に入った比丘にも寿行があるかだというのである (M. I. p. 296)。

十二縁起の行 (s) は身行・語行・心行 (または意行) の三と説明される (S. II. pp. 4, 43, M. I. p. 54; A. I. p. 122. II. p. 231, M. I. p. 389)。¹⁾ これは s を業 (行為とその余力) とを同一視する解釈を生む。悪意を伴なう身行、語行、意行を作れば、悪意を伴なう世界に生まれる (A. I. p. 122. II. p. 231, M. I. p. 389) などといわれる。この身行等は行為とその余力であり、次の生存を規定する原動力となる。そしてその行為には悪意 (または無悪意) という意思、心がけが基礎になっている。

四諦を如実に知らない者は、生・老・死等に導く諸行を作って、生老死等という崖に落ちるが、それら諸行を作らなければ、生老死等から解脱する (S. V. pp. 448) といわれる。

十二縁起の行が身行・語行・心行の三であり、その行の縁によって識 (認識) がある、²⁾ というのは、行為やその余力、影響力が認識を規定することになるというのであろう。また s (行) は福行・非福行・不動行に分けら

るから s が起こり、触が減するから行が減する (S. III. p. 68) という。また、意識して身行等を作るのみならず、意識しないで (asampajāna) 身行等を作る (S. II. p. 40) ともいわれるように、s は意識的な志向だけではなく、無意識的な志向、傾向性でもある。

s の一つの定義は、有為を用意する (saṃkhataṃ abhi-saṃharoti, 作られたものに用意する)。色を色であるものとして (rūpaṃ rūpattāya) 有為を用意する (色となるように色を作られたものに用意する)、という。受・想・行・識についても、同様。つまり五蘊の一々をそれぞれのものとして作ろうとするのである。これは、s (複数) が形成力たる所以であり、五蘊の一々を形成する原動力であることを示している。五蘊とは、広く解すれば勿論世界をも含むにしても、多くの場合は、我々の身心 (『身心の要素』) である。色は四大元素および四大元素から成る色とであり、食物の集より色の集があり、食物の減より色の減があるという (S. III. p. 69)。³⁾ この色はまさに肉体である。

s は五蘊の一々を作る、即ち我々の身心を成り立たせる。つまり s は身心を成り立たせる・、勢い、勢力であ

れることがあり、その各々によって福 (善)、非福、不動に従う識があり、無明を捨て明が生ずれば、それらの s を作らず、意思せず、何ものにも取著せず、般涅槃する (悟境に入る、寂滅に帰する) という (S. II. p. 82)。⁴⁾ そういう識を規定する力、輪廻を規定する原動力は、行為 (三行) から生ずる。ではその行為、三行とは何か。

この身行は出息、入息 (呼吸)、語行は尋・思 (覺・観、粗・細なる思考)、心行は受 (感受) と想 (表象、觀念) であると説かれる (S. IV. p. 293, M. I. p. 301)。⁵⁾ 呼吸が身行であるのは、呼吸が身の活動であるだけでなく、呼吸が身の活動をあらしめる原動力である。尋思即ち心に思うことが、語を発する原動力となる。受と想が心行であるのは、受や想が心の内容となり、心の活動のもと、原動力になることを意味するのであろう。s は呼吸のような無意識 (睡眠等) においても行われる活動も、尋思のような心のはたらきをも含む。

五蘊の中の s は六思身 (cetasā-kāya, p. 六種の意思の集合) である。即ち色思 (rūpa-sañcetanā)、声思、香思、味思、触思、法思である。思とは意思、意志、志向の意である。つまり色等に対する意思、志向である。触が起こ

る。その勢力は五蘊 (身心) の中の s であり、身心以外のものではないから、s はそれ自体、身心の勢力である。s は意思 (六思身) であるというが、意識的な意識のみならず無意識的な志向をも含み、身心の勢力として生命持続力 (āyu-s, jīvita-s.) ともなる。

五蘊即ち身心を統一するものは何か。その点は明確ではないが、諸の s 即ち複数の形成力、勢力、エネルギーが考えられている。

古ウパニシャドにおいては、身心の統一者として見出されたのは、アートマン (我) であったが、このような我を考えずに、諸の s を考えたのである。またブラーフマナや古ウパニシャドにおいて、身心の諸機能 (呼吸や感官その他のそれ) は神格 (devatā) と呼ばれることがあった (Albarenga-up. I. 1. 4; I. 2. 4)。⁶⁾ 仏教では身心の諸勢力が諸の s と呼ばれるのである。

すでに見たように、s の内容は多様である。そして原始經典も、身心の多様な活動や状態について、s という語を用いる。『相應部』三六・一一には、諸行 (s) の減として、禪定において減する身心の活動を列挙している。即ち、初禪において語が減し、第二禪においては尋・伺

（『覺・觀』が滅し、第三禪においては喜（*miti*）が滅し、第四禪において出入息が滅し、空無辺処において色想が滅し、識無辺処において空無辺処想が滅し、無所有処において識無辺処想が滅し、非想非非想処において無所有処が滅し、想受滅において想と受が滅し、漏尽の比丘には貪・瞋・癡が滅している（S. IV. p. 217）¹、という。これら語ないし貪・瞋・癡が *s* と考えられる。癡は愚癡、迷いであるが、誤った考えもこれに入る。誤った人生觀、世界觀も *s* に含まれる。

「色は我である」と觀ずると、その觀方（*samanupassanā*）は *s* である。「我は色を有する」、「我の中に色がある」、「色の中に我がある」と觀ずると、その觀方は *s* である。受・想・行・識についても同様である（S. III. p. 968）。つまり我見、我執が *s* なのである。同様に、常見、斷見、疑惑や疑念があることも *s* である。それらの *s* について、「無明の触より生じた感受されるものに触れると、無聞の凡夫に渴愛が生じ、それより *s* が生ずる。その *s* も無常であり、作られたもの（有為）であり、縁生したものであり、渴愛も受も無明も同様である。そしてこのように知り觀るならば、直ちに諸の漏の滅がある」

〔なお最近の諸研究の中では、上杉宣明氏の *s* に関する見解（『佛教研究』第七号、第九号、第一三三号）に対して、筆者はおおむね賛意を表すが、筆者は *s* の意味をたずねつつ、仏教の身心觀、そして生命觀を明らかにすることをめざしている。〕

る」（S. III. pp. 96-98）と繰返されるのである。このように誤った觀方としての *s* の滅は、縁起の觀察によって、*s* も無常であり縁生したものであると知ることによるのである。

禪定によって身心の活動を減して行くのは、身心の訓練を意味している。*s* の滅や *s* の輕安を説くのは、身心の訓練を重視していることになる。

なお、後の説一切有部においては、行蘊の中に多くの心所法（但し受・想を除く）と心不相応行を含む。そのように多様な身心の活動や状態を含む傾向はすでに原始經典に認められたのである。心所法や心不相応行を含む行蘊とは、スチエルバックキーもいうように、*will and other forces*（意志と他の諸力）であり、つまりは勢力であろう。その意味も原始仏教において認められたのである。

諸行無常という。*s* は有為（作られたもの、現象界）に同じである場合もある。しかし *s* は第一義的には能動的な勢力、身心の勢力である。仏の入滅に際して、諸行無常といわれるときには、単に万物が無常だというのではなくて、まずは身心の勢力、生命力が無常であるの意と理解すべきであろう。

源智と石清水八幡宮

野村恒道

はじめに

法然の弟子勢觀房源智は、その觀類に紀氏一族を持つと考えられるが、この紀氏一族は代々石清水八幡宮の祠官の家柄である。当時は神社といっても神仏習合思想の中で、仏教的儀式が行われるのは、極めて日常的なことであり、紀氏も別当職を勤めている。石清水八幡宮で行われる行事では、大般若供養など仏教的な要素は、さまざまあるが、ここでは法然の提唱した専修念仏の思想がどの程度、石清水八幡宮において窺われるかについて、論を進めて行きたい。

1

源智は、法然の寂した建暦二年（一二二二）十二月廿四日付で、法然の報恩謝徳の為の阿弥陀仏像を建立すると

佛教論叢

第 30 号

昭和 61 年 9 月

浄土宗教学院